メディアと人によって「つくられる」怪異

―「日本の怪異―その発生と展開について」講演会感想―

八巻詩子

大衆文化研究センターでは年に一度、乱歩や大衆文化に関連したテーマを設定し、立教大学のキャンパスを使って講演会を開催している。しかし、本年度は緊急事態宣言下での開催となったため、講演会動画をオンライン公開するという形をとった。今回の講演は国際日本文化研究センターから木場貴俊先生をお招きし、「日本の怪異―その発生と展開について」というタイトルで「怪異」をテーマに二部にわたる講演会を行った。卒業論文執筆時より近世文学における怪談や怪異について関心を持っていた私にとって、とても興味深い講演であった。

第一部は、木場先生のご著書『怪異をつくる　日本近世怪異文化史』（二〇二〇年、文学通信）を中心とし、「怪異」を考えるうえでのヒントとなる講演をお話いただいた。先生によると、怪異とは化物などのあやしい物事を包括する概念であり、怪異は人間が認識・対処・記録・創作・表現することによってはじめて「つくられる」ものである。

怪異の歴史に着目すると、日本の怪異の受容は独自の理解によるものであった。中国から輸入されたものが、日本では政治と密接に結びつき、「恠異（けい）」という概念になった。「恠異」は中世以降も日本独自の解釈によって政治利用されてきたのである。

では怪異はどのようなものとして認識されていたのか。まず、怪異と認識する条件としては希少な事例であることが挙げられる。しだいに怪異を珍しく感じることは無知や経験不足からという認識になり、学問から怪異に対処するという流れが誕生する。儒学では林羅山・古賀侗庵らが怪異を学問の素材とし、本草学においては貝原益軒などが怪異をモノとする視点から分析した。

さらに、江戸時代では化物絵など視覚的に怪異を表現した書物が多く出版されたことから、広く人々に知られるようになった。子供向き絵本や図入り事典にも怪異が登場しているし、鳥山石燕の「画図百鬼夜行」は絵手本として広く流通していたことが考えられる。

第一部のトークセッションでは、仏教で怪異がどのように扱われていたのかという質問や、本草学者の怪異に対するモチベーションについての質問が挙がった。本草学者は探求心・好奇心から怪異を分類し理解したいという動機があり、近世では書物などの流通により情報が多くなったことで知識が増え、怪異に対する認識がアップデートされたと考えられることをお話しいただいた。次に、中国では怪異を学問の対象としていたのかという問いでは、中国における本草学では周縁的な外部のものを怪異とみなしていたことに加え、『聊斎志異』のような文芸で怪異が展開していくのではないかという回答をいただいた。怪異をつくることの政治性と演劇についての話題では、歌舞伎などで現実の事件を扱うにあたり、怪談ものの趣向を取り入れることがあると述べられた。

続いて第二部では、怪異の流布方法について考察していただいた。新型コロナウイルス感染症が流行する中、「アマビエ」という妖怪が疫病を退散する効力があるとして様々なイラストや商品が出されたことは記憶に新しい。「アマビエ」について現存する資料は一つしかないが、所蔵先を明記すれば利用できるという手軽さがこうした「アマビエ」ブームに拍車をかけたのではないかと考えられる。一方で、日本ではオンライン講座などの教育や商用利用が可能なデジタル公開資料はまだまだ少ない。現代の怪異を考えるにあたり、こうした資料の利用方法についても考慮する必要がありそうだということをお話いただいた。

第二部のトークセッションでは、香川雅信氏の『江戸の妖怪革命』（二〇一三年、角川ソフィア文庫）とのアプローチの違いや、怪異が「商品化」される現代の妖怪ブームについてのセッションが行われた。また、近代小説における怪異の捉え方、グローバルな怪異研究の展望といった話題も挙がり、現在私たちの抱える課題が見えてくるような、幅広い内容になった。

「怪異」という言葉を理解しているつもりでいたが、この講演を拝聴し、日本における怪異の捉え方が特殊であることがわかった。怪異はメディアと大きく関わっており、江戸時代の出版文化と現代のオンライン資料では媒体は異なっているが、人によって怪異が「つくられる」ことに変わりはないのだと思う。

（立教大学大学院生）